

## 《研究報告》

# 育 ち 合 う

梅花幼稚園 糸 賀 由 美

梅花幼稚園は、1900年（明治33年）カナダの宣教師によって、上田市の中心に建てられた。現在、3歳児21名、4歳児19名、5歳児20名、計60名の子どもたちと園長を含む職員5名が生活を共にし、あそびを中心とした保育形態をとっている。

一つひとつが子どもたちの体ほどもある木製の大型積み木は、子どもたちに人気のある遊具である。その積み木を組み立てたり、積み上げたりして、車や電車、家など自分たちの身近にあるものをつくり出してあそんでいる。積み木の家づくりでは、どこにどうやって積み木を置くか…また、積み上げ方などを友だち同士で相談し、時にぶつかりあいながら各々思いを出して、一つの家をつくりあげている。また、自分たちがつくっている積み木だけでなく、他の子がつくっているところも気にかけて、みて回る姿もみられる。

### 事例「それ あぶないよ」

まり子（5歳 女児）が積み木の家をつくり始めると、「これ、たなみたい」、「まどみたい。まり子ちゃん、これまど？」と、まりこの家を見て5歳児の女の子二人が聞いてきた。まり子は少し笑いながら、「わからない」と答える。一人の子が、「じゃあ、なんにでもなるね、のぼってもいいし。」と提案すると、「そうだ、かいだん つくろう。」とまり子が言い、三人で一緒につくり始める。そして側にいた教師に、「せんせい、ここにいたのせて。てんじょうくらいのたかさにするの。」と頼む。教師は「このままだとグラグラしない？」と、すぐに板を乗せずになずねる。そこへまり子たちの横で家をつくっていた、年長の男の子たち数人が近くにきて、「それ、あぶな

いよ。だって（積み木の幅が）せまいもん。」「もっとさ、（幅の）太いのつかって、  
じょうぶにしないと。」と言う。「どうやるの？」とまり子が聞くと、一人の子が  
「ここに（土台を指さして）もうひとつ、うすいのをくっつければ、ふとくなるよ。」  
と教える。「じゃあ、さがしてこよう。」とまり子たちはつんであった家の高さを少し  
低くしてから、男の子たちにも手伝ってもらって、土台の方から幅を広くし、更に高  
い家づくりをした。

この事例からも言えるように、他の子がつくっている家を見て、高く積み上げるに  
は土台からしっかりつくることが大切だということや、ずれて壊れそうなところを知  
らせるなど、自分の経験からの積み方を教えたり、一緒に考えている。このようなこ  
とは、異年齢同士の中でもみられ、重いもの、高い所は大きな子がつみ上げている姿  
がある。そして、それぞれが違うつみ木の家づくりをし、違うあそびをしているよう  
でも、お互いにかかわり合いながらあそんでいる。

積み木の家でのおままごとに使われるものは全て、各家庭で不用となった食器・な  
べ・炊飯器などを園に頂いて使っている。せとものの皿は、すぐに割れてしまうもの  
だが、割れるという経験をする中で、割らないように使うこと、割れたらどうするか、  
そこから物を大切にすることを育てたいと願い、本物を使うことを大事に考えている。

園庭では、砂や泥でケーキ・プリン・どろだんごづくりをしている。そして、友だ  
ちと食べあったり、教師に食べてほしいと持ってくる子もいる。おだんごづくりは、  
崩れやすくてすぐに壊れてしまうおだんごから始まり、毎日重ねてつくる中、どこに  
ある、どういった砂や泥を使えば硬いどろだんごがつかれるかを発見したり、友だち  
と互いに教え合っている。それは、砂場の砂に限らず、すべり台の下サラサラした  
砂や、水たまりのまわりのやわらかい土など、壊れにくくて硬いおだんごをつくるた  
めに、色々な場所の泥を握る。また、力加減や水加減を子どもたちの間で伝え合っ  
てあそんでいる。一日かけてつくった大事なおだんごをとっておこうと、誰にもわか  
らないような秘密の場所にそっと隠したりもする。園でクッキーづくりをすると、い  
つもつくっているどろだんごの要領で、クッキーの生地を手のひらで丸めて、おだんご  
クッキーが上がる。

おままごとであそぶ中、寒い季節になると、四角いつみ木の上に毛布を何枚も掛け、こたつをつくり、そこにあたりながらあそぶ様子や、つみ木でテレビやお風呂・トイレをつくるなど、子どもたちの家庭での生活が再現され、その一つひとつに工夫がみられる。そして、子どもたちの“こうしたい。” “これをつくりたい” という思いが実現できることも、つみ木あそびの魅力の一つであると言える。このようなあそびから、レストランなどの、お店やさんへとあそびを広げる。レストランやさんでは、紙をちぎってごはんにしたり、細かく切ってスパゲティーやラーメンをつくり、コックさんやウェイトレスさん、時にはお客さんになってあそんでいる。「とりあえず〇〇をください」と注文し、大人の会話をそのまま再現する姿もみられる。また、“レストランや”と書いて、店の看板をつくり、よくみえる所に貼ったり、食べ物の絵が細かく描いてあるメニュー表なども、自分たちがレストランへ行った経験をもとに、お互いにアイディアを出し合いながらあそんでいる。そういった、レストランやさんから“本当の料理をつくって食べたい”という子どもたちの思いから、“料理の日”を設け、前日に材料を各自持ち寄って、朝登園してから料理をつくることを始めた。玉ねぎの皮むきから、人参・ジャガイモを包丁で刻むこと、大なべでいためたり煮こむ時に交代でかきまぜること全てに子どもたちがかわり、カレーやシチューなどの料理をつくっている。使う包丁もステンレス製のよく切れる物で、そえる手を丸くするなど、切る時に十分注意をしている。そんな中、小さい子に一生懸命、使い方を教える年長組の姿もみられる。

今まで述べてきたように、子どもたちが料理・どろだんごづくり・つみ木などのあそびによって、生き生きと活動し、自分で判断をしたり、思いを出し合ってあそびを創り出していくためには、教師の環境づくりも大切である。子どもたち一人ひとりの育ちをみ、また願いを大切にしながら、教師も共に育ち合いたいと考えている。